

北海道哲学会・北大哲学会共催シンポジウム《ラッセル：現代哲学への転回点としての》

## 「分析の方法」と面識

高 村 夏 輝

### 1 基礎付け主義から「分析の方法」へ

従来、ラッセル哲学は、デカルト的な基礎付け主義的認識論に導かれて形成された体系であると考えられてきた。つまり、数学的知識や外界の知識といった一定の知識領域で認められている数や物体のような疑わしい存在を、個物やセンスデータのような存在の確かな対象から構成し、また数学の定理や物体に関する知識などの疑わしい信念を、論理学やセンスデータに関するより確実な知識から演繹的に導き出すことで、そうした知識領域を基礎付ける試みであると解釈されてきた。

しかし時折指摘されるように、以上のような解釈はラッセル自身の見解と一致しない。たとえばラッセルは、数学が論理学に還元されるとしつつも、論理学の公理の一部よりは、数学の定理のあるもの（たとえば「 $2 + 2 = 4$ 」）のほうが自明だと考えている。こうした点を踏まえて最近とられているのが、数学の哲学における「遡行的方法 *regressive method*」、あるいは認識論・形而上学における「分析の方法 *the method of analysis*」という、ラッセル自身が採用していた哲学的方法論を踏まえた解釈である<sup>1</sup>。「分析の方法」では、一定の知識領域（これをラッセルは「データ」と呼ぶ）の全体を受け入れ、それに

---

<sup>1</sup> Irvine (1989) の論文を嚆矢として、Hager (2003) や中川 (2006) がそうした解釈を取っている。「遡行的方法」に関しては、Russell (1907) がもっとも重要であり、PM, ppv-vi [邦訳 8-9 ページ] などでも表明されている。「分析の方法」については、PP, pp25-6 [邦訳 31-3 ページ]、OKEW, pp66-68 [邦訳 146-50 ページ]、PLA, p161 [邦訳 10-1 ページ]などを参照せよ。

内在的に分析が行われる。分析の目的は、データの保存すべき部分をすべて演繹できる前提、および存在を認めるべき単純な対象（すなわち論理的原子）を、最小限まで絞り込みつつ（「オッカムのかみそり」）データ自身の中から切り出すことにある。そしてそうした前提や対象に到達すると、こんどはデータをそれらから演繹することによって、当初は無秩序で不整合すら含んでいた知識領域が体系化され、斉合的な信念の集合であることが示されることになる。そしてそれに対応して対象や事実が実在するとされ、論理的原子論という存在論的体系が形成される。

ここで分析によって到達された前提の中には、センスデータに関する知識や矛盾律のように確実な知識とみなされるものだけではなく、かなり疑わしい信念も含みうる。たとえば数学の哲学では無限公理や還元公理が、外界論においては「円いものは斜めからは楕円に見える」のような、いわゆるパースペクティブの法則のような一般的知識が前提となるが、それらはかなり疑わしい、あるいは一定程度の蓋然性を持つに過ぎないものである。あるいは外界論におけるセンシビリアのように、分析を経て構成された体系の基底において認められる対象の中には、決してその存在が自明でも確実でもないものが含まれる。

「分析の方法」のこれらの帰結に困惑を覚えるとすれば、それは論理的前提と認識論的前提を区別していないからである。データが演繹的に体系化されたときに前提となる知識は、データの論理的な前提ではある。しかしその導出の方向は、知識の正当化の秩序ではない。認識論的には、そうした前提ではなくむしろ演繹されるデータのほうが根本的であり、疑わしい前提や対象の存在仮定はデータを演繹しようということによって正当化されるのである。最終的に構築される体系は演繹的なものであるが、その前提を探究する方法は、そして前提の正当化の方法は帰納的なのである<sup>2</sup>。

しかし、こうして論理的前提と認識論的前提を区別し、論理的前提に蓋然的な知識やかなり疑わしい信念、対象が含まれていてもかまわないとすることで、

---

<sup>2</sup> Russell, (1907), pp273-4.

「分析の方法」を基本に据える解釈からすべての困惑が取り除かれたわけではない。なぜなら、分析の方法を通じて形成される演繹的な体系、すなわち論理的原子論は、基礎付けの秩序ではないにせよ、やはりある意味で認識の秩序であるからである。すなわち、論理的原子論においては、単純な対象は「面識 acquaintance」というもっとも単純な形態の知識として、またパースペクティブの法則など、データを演繹する際に前提とされる一般的知識は、存在論的に基底的な事実を知覚することによって得られた直観的知識として、知識体系の前提に位置づけられるからである。それゆえ知識の演繹体系は、より単純なものからより複雑なものへと知識が拡大していく道のりでもある。このことを踏まえるなら、次のような疑問が生じる。

分析の方法は、データから前提や対象を帰納的に特定する試みであるとされた。しかしデータという複合的な知識に、すでに前提となる一般的知識や単純な対象の知識が、単純な知識として含まれているのなら、なぜそうした前提を特定し、またその前提を正当化するのに帰納的な方法をとらねばならないのか。むしろ、自分の持っている知識を反省して、それが含んでいる知識や対象を把握すればよいだけではないのだろうか。

話題を単純な対象の知識に絞って、疑問をもう少し具体化してみよう。たとえば物体に関する日常的な知識というデータは、ラッセルによれば、実は物体ではなくセンスデータへの指示を含み、そしてその物体についての単称的信念ではなく記述的な信念、つまり量化という論理形式を持つ信念である。こうした信念の実際のあり方が分析の方法によって明らかにされんとすることは、信念の構成要素や論理形式の特定も帰納的になされんとすることである。つまり当の信念以外のさまざまなデータとの斉合性を考慮しつつ、最善の分析結果として、その構成要素や論理形式が特定されることになる。しかし一方で、ラッセルは信念内容に関する「面識の原理」<sup>3</sup>と信念形成に関する「多項関係理論」を支持してもいた。すなわち、我々が理解可能な命題（信念内容）は面識され

<sup>3</sup> Russell (1911) および PP, p58 [邦訳 72ページ] を参照。

ている対象のみから構成されていなければならない、そして信念とは、主体が面識した論理形式に従って、そうした対象を判断という心的関係によって結合した複合物であるとされた。たとえば主体  $S$  の  $aRb$  という命題を内容とする信念は、 $S$  自身が  $a$ 、 $b$  という個物、関係  $R$  という面識された対象を、やはり面識されたものである  $\phi(x, y)$  という二項関係的論理形式を参照しつつ、判断するという行為（これを関係  $J$  とする）によって結合して出来た複合物  $J(S, a, b, R, \phi(x, y))$  という五項関係的事実であるとされる<sup>4</sup>。信念がこうして形成されたものだとすると、主体はその構成要素や論理形式を、わざわざ分析するまでもなく知っているはずではないか。だとすれば、なぜ分析の方法という帰納的なやり方をとらねばならないのか。信念内容を内観すればアприオリに知りうることはないか<sup>5</sup>。

この疑問に答えるべく、本論文では「分析の方法」が面識の原理および多項関係理論と整合的であることを示し、それによってラッセル哲学を根本的に再考してみたい。

## 2 なぜ体系化は必要とされるのか

まずは基本的なところから始めよう。センスデータに関する知識によって基礎付けることが目的でないのなら、なぜそうした知識やパースペクティブの法則のような一般的な知識から、物体についての信念を演繹して見せなければならないのか。少し長くなるが、次の引用を読んでいただきたい。

論理的には原始的だが心理的にはそうではない信念を反省するとき、よく

<sup>4</sup> ここで述べた多項関係理論は、『知識の理論』におけるものであり、『哲学入門』などの初期の理論では論理形式という存在は導入されていない。

<sup>5</sup> ラッセルがデカルト主義的認識論を支持しているなら、信念の実際のあり方も構成要素もアприオリに特定されることになる。たとえば物体に関する信念が記述的であること、論理的固有名の意味がセンスデータであることなどは、アприオリな議論によって確立されると伝統的には考えられてきた。そうした解釈を示しているものとして、たとえば McDowell (1979), McCulloch (1989) がある。

考えてみればそれらは心理的にも原始的である信念から論理的に演繹可能だった、とならないかぎり、そうした信念について考えれば考えるほど、その正しさへの信頼は少なくなっていくのが分かる。たとえば、テーブルに椅子、木や山は、私たちがそれらに背を向けている間にもそこにあり続けていると、私たちはごく自然に信じている。私は、こうした事柄が成り立っていないと主張しようなどとは微塵も思わない。私が言いたいのは、それらの事柄が成り立っているかどうかという問題は、それらの事柄がどれほど明白だと考えられていようとも、その明白さを理由にして即座に片付けられはしないということである。それらが存続しているという信念は、二、三の哲学者を除くすべての人にとって論理的に原始的である。だが、心理的には原始的ではない。それらは、心理的には、テーブル、椅子、木、そして山を見ることを通じてはじめて生じる信念である。「今までそれらを見ていたことを理由として、まだそこにあると想定する権利が我々にあるのだろうか」という疑問が真剣に立てられるなら、何らかの議論が出されるべきだと感じられるし、そして何の議論も出てこないのなら、そうした信念は善き思い込み以上のものではないと感じられてくる。私たちはこうした感じを、感覚の直接の対象に関しては持つことはない。それらはそこにあり、その瞬間的な存在を問題にする限りでは、なんら議論は必要とされない。したがって心理的に原始的な信念よりも、心理的に派生的な信念のほうがより正当化を必要としている<sup>6</sup>。

まず、外界の事物の信念が明白だとされていること、そしてそれが問題になるのは、それがかなり疑わしいからではなく、感覚経験との論理的な連関が欠けているからであることに注目すべきである。なぜ論理的な連関の欠如が問題になるのか。それは、知覚の相対性（一つの事物が、視点状況によって多様な現われを示すこと）や知覚の因果説を理由として、「感覚されているのが物体

<sup>6</sup> OKEW, p69-70. [邦訳 152ページ。ただし訳は引用者による]

そのものではないばかりか、そもそも物体が存在しないと考えても、外界について我々が持つ一連の経験とまったく論理的には整合的である」ということが示されるからである<sup>7</sup>。つまり物体の存在や同一性に関する我々の常識的な信念以外にも、感覚される事実の知識と整合的で、かつそうした知識を説明する競合仮説が論理的に可能だということが問題なのである<sup>8</sup>。そしてそれゆえ、経験との論理的連関を作り上げ、そうした常識的信念を抱くことが我々にとって必然であることを示さなければならないのである。

次に注目すべきは、物体に関する信念と経験の間に論理的連関が欠如する理由が、物体についての信念が心理的には派生的であるが論理的には原始的であるという点に求められていることである。ラッセルによれば、得られ方によって信念を区別する際、二通りのやり方で区別することが出来る。まず、ある信念が心理的に派生的であるのは、それが「観念連合やそれと同様の論理外の過程によって」、他の一つ以上の信念や、感覚された事実によって引き起こされ

<sup>7</sup> PP, pp, 8 – 11 [邦訳 10 – 5 ページ]、OKEW, pp63 – 5 [邦訳 145 – 7 ページ]。知覚の相対性や知覚の因果説が提起しているのは、全能の悪霊の想定のような、我々の知識総体をその外側から懐疑する可能性ではなく、むしろ物体が時間を貫いて同一性を保ち存在し続けているという常識的な信念と、その他の経験や科学的知識との整合性の問題、つまり知識総体に内在的な問題である。だからこそ、データの内在的斉合化という分析の方法によって答えられるのであり、またこの問題を立てて常識的信念を批判的に吟味することこそ、「分析の方法」におけるデータの分析というプロセスなのである。

<sup>8</sup> 競合する仮説の可能性は、『外界についての我々の知識』という著作に特有の問題であり、それ以前の『哲学入門』にはない問題意識とすべきかもしれない。というのも、競合仮説の可能性は、ラッセルが『哲学入門』の立場を、その直後の「物質について」という論文において自己批判した際の主要な論点であるからである。しかし「分析の方法」に基づくラッセルの認識論が基礎付け主義ではなく斉合説であるという本論文での解釈は、『哲学入門』に関しても成立すると思われる。というのも、確かにラッセルは『哲学入門』では競合仮説の存在を問題にしていないが、そこで問題にされるのはセンスデータから物体への推論が本能的なものであって論理的ではないということであり、そして知識の体系化、斉合化によってその問題はクリアされるとしているからである。PP, p25 – 6. [邦訳 31 – 3 ページ] を参照。

ているときである<sup>9</sup>。ただし、感覚された事実が原因となっているとしても、信念がその事実を主張している場合、それは派生的であるとはみなされない。これはどういうことか。今、あるセンスデータが長方形であるという事実を感覚しているとしよう。この事実を原因として生じるのは、「このテーブルは長方形である」のような物体に関する信念だけではない。「これは長方形である」というセンスデータに関する信念もまたそうである。しかし前者が主張しているのは物体に関する事実であって感覚された事実ではないのに対し、後者はその原因となった感覚された事実を主張する信念である。それゆえ前者のような物体に関する信念は心理的に派生的だが、後者のようなセンスデータに関する信念は、経験によって引き起こされているにもかかわらず、心理的に原始的であるとされるのである。また信念は、論理的に原始的か派生的かによって区別することも出来る。この区別は、信念に到達するために信念主体が推論を行ったか否かに基づくものであり、主体が実際に推論を行った結果信じるようになった場合は派生的だが、そうでないなら原始的である。

だとすると、信念が原始的か派生的かを問題にするとき、ラッセルは単にそれが何らかの心的過程を経て形成されたかどうかではなく、その心的過程が主体自身の合理的な能力の自発的な活用なのか、それとも心的因果関係によるものなのかを分けて考えようとしているとあってよいだろう。そして物体に関する信念は心理的には派生的だが論理的には原始的である、つまり感覚経験という心的状態を原因とするとはいえ、主体は一切その合理性の能力を自発的に用いることなくその信念を抱くようになる。これはつまり、一人称的観点からすれば、物体に関する信念は所与であるということの意味する。ならば、次のような推定が成り立つ。すなわち、信念形成のあり方を記述する多項関係理論は、主体の意識的な心的過程、言い換えればパーソナル・レベルでの心的過程を扱うのではなく、無意識的な、あるいはサブ・パーソナルレベルでの心的過程を記述しているのではないか、という推定である<sup>10</sup>。

---

<sup>9</sup> OKEW, p69.

そんな推定は論外だと言われるかもしれない。というのも、多項関係理論は信念を、主体が面識された対象のみから、面識した論理形式に従って形成するものとしているからである。面識が主体と対象との意識的な心的関係である以上、それを利用する判断形成もまた意識的な過程とすべきではないか。そこで次節では、『知識の理論』における論理形式の面識に関する議論を手がかりにして、こうした疑念を解消したい。

### 3 「面識」概念の再検討

ラッセルの面識概念に対する最も強いイメージは、「「これ」のような論理的固有名の意味を与える、それゆえ直示的同定を可能にする意識的な状態だ」というものであろう。つまりある対象を面識しているとは、一定の対象領域からその対象を選び出し、それをその他のすべての対象から識別しているという意識的な状態だと考えられてきたと思われる。しかし実際には、ラッセルの面識概念は、もっと受動的な心的状態をも包摂するものであり、直示的同定を可能にする意識的な状態は、面識の一形態である「注意 attention」にすぎない。

たとえば我々は視野の中心にあるものを見ている際にも、視野の全体を意識しており、それゆえ視野の周辺部に見えている諸対象も意識している。しかしそれがいかなる対象であるか、いかなる性質を持つか、そしてその対象とそれ以外との境界すら判明ではない。しかし、この判明ではない対象への意識の関わり方こそラッセルが「面識」と呼ぶものであり、中心にある対象をその他のものから識別している意識のありかたは「注意」である<sup>11</sup>。ここでは面識は対

<sup>10</sup> ここからは必ずしも、サブパーソナルな心的過程の前提となる、センスデータとの面識による知識まで無意識的なものとしなければならないということにはならない。後に見るように、ラッセルの面識概念は無意識的な状態も含みうるものであるが、センスデータに対する面識関係がそのようなものであるとすることは、そもそも「センスデータ」という概念と抵触するだろう。この問題に関しては、高村(2007)を参照せよ。

<sup>11</sup> TK, p8-9. この箇所では「面識」ではなく「経験 experience」という語が使用されているが、ラッセルはこの二つの語で同じ関係のことを指している。

象識別的な意識というよりも、むしろそうした意識を可能にする背景的意識と考えられている<sup>12</sup>。

今挙げた例では、「ある対象が注意されているならば、それは面識されている」と言えるだけでなく、「ある対象が面識されているならば、それは注意可能である」とも言える。つまりある対象が注意されていなくとも、それが面識されているならば主体は自発的に注意をその対象に向けかえることができ、それゆえここでの面識とは意識的な状態だということになる。また、視野の全体が面識されており、そしてその一部がさらに（面識関係の限定された一様態である）注意の対象となることから、一つの複合物全体が面識されているならば、その構成要素も面識されているということが言えると思われる。しかし、『知識の理論』の第二部で、ラッセルは複合物の面識について論じているのだが、そこでは、複合物を面識しているにもかかわらず、その構成要素を面識していない場合や、あるいは面識してはいるもののそのことを知らない場合があるとされている。つまりラッセルの面識概念は、複合物に対する面識関係がその構成要素に対する同じ関係の成立を含意するものではない。さらに同じ箇所での議論から、主体が注意を向けることができず、それゆえ意識されているとはいがたいものまで面識の対象として認めるほど広い概念でさえあることが分かる。これらが一体どういう事態であるのかを、自分自身の信念や判断という面識される複合物の構成要素を手がかりとして説明しよう。

先にも述べたように、主体  $S$  の  $aRb$  という内容の信念は、 $S$ 、 $a$ 、 $b$  という個物、関係  $R$ 、 $\phi(x, y)$  という二項関係的論理形式を構成要素とし、それらが判断という関係  $J$  によって関係付けられてできた複合物  $J(S, a, b, R, \phi(x, y))$  である。ラッセルは一貫して、自分自身の思考や判断を面識の対象として認めていたので、この五項関係的複合物は  $S$  自身によって面識される。と

<sup>12</sup> Russell (1911b) の148ページでは、「かつて心の前にあり、機会があれば再び心の前にあるだろうと言えるのなら、現に心の前にない時点でさえ、私はその対象を面識している」と言われている。

ころが『哲学入門』とは違い、『知識の理論』以降では自我は面識されず、記述によって知られるだけだと考えられるようになった。つまり、 $J(S, a, b, R, \phi(x, y))$  という全体は面識されるが、構成要素  $S$  は面識されないのである。面識されないが、それにもかかわらず  $S$  が存在し判断の要素となっているとされるのは、信念に関わるさまざまなデータを分析<sup>13</sup>した結果、そう考えるべきだと結論されるからである。このように、分析という過程の目的はデータである複合物の構成要素を見出すことだといえるが、そうした要素が記述によってしか知られないということもありうるのである<sup>14</sup>。

一方、自我と同じく信念の要素である論理形式は、面識の対象として認められる。そう考える理由の一つとしてラッセルがあげているのは、複合物を知覚していないにもかかわらず、それを表現する文や発話を理解することがありうるということである<sup>15</sup>。たとえば他者の発話を通じて  $aRb$  ということを理解する場面がそうだが、ラッセルは、こうした二項関係的な内容が理解されているときには二項関係的論理形式が面識され理解されているとすることは「逆説的であるどころか、まったく当たり前のことだと思われる」としている<sup>16</sup>。

こうしたラッセルの言い分には、かなりの抵抗を感じる向きも多いと思われる。そういう疑念をはらすべくラッセルが持ち出してくるのが、面識と注意の

<sup>13</sup> 『知識の理論』では、第一部の第3章でなされている。

<sup>14</sup> TK, p119では、複合物のすべての構成要素と論理形式が面識されるような場合の分析を「完全」な分析、記述によってしか知られない要素を含む場合を「記述的」な分析と呼んでいる。記述的な分析がありうるということは、認識論的に単純か複合的かという区別と、存在論的に単純か複合的かという区別が必ずしも一致しないことを意味し、しばしば見逃されがちだが、ラッセルにおける認識論と存在論の関係が「単純な要素における一致」という簡単なものではないことを示している。また、p121では、信念ではなくある対象を面識しているということ、すなわち自分自身の経験も面識可能な心的出来事であるが、その場合に内観されるのは対象だけであり、面識関係は意識されないとしている。ここから、判断関係  $J$  もまた面識されず、記述的に知られるだけではないかと推測することも出来る。

<sup>15</sup> Ibid. p101.

<sup>16</sup> Ibid, p129.

区別である。論理形式など面識していないと言いたくなるのは、「普段考えているときには、形式が注意されていないから」であり、「多くの心的事実は、きわめて抽象的な思考をするときにしかまったく注意されないような対象との面識を含んでいる」のである<sup>17</sup>。それゆえ、内観し、自分の思考や信念を面識しているときにも、我々は論理形式が構成要素となっているということを知らないでいるのである。このような、構成要素を面識しているが知らないという事態を、ラッセルは「ある複合物の構成要素を、それが構成要素であることを意識することなく *without being aware* 面識する」こととして表現している<sup>18</sup>。あるいは「論理形式との面識は、論理についての明示的な思考 *explicit thought* が始まる以前に、それどころか我々が文を理解できるようになるとすぐに、[引用者註：その理解という心的状態の中に] 含まれている」と言われている<sup>19</sup>。これらの論点から、論理学や文法理論を学んでいないかぎり、主体は注意を自発的に論理形式へと向けることが出来ない、つまり論理形式を意識していないとすることは自然であろう<sup>20</sup>。ここで認められている信念等の複合物の構造の理解、すなわち論理形式との面識の知識とは、無意識的な、一種の暗黙知として主体に所有されている知識ということになる。面識は、意識的な状態とは限らないのである。

そしてここで我々は、前節までの議論、すなわち多項関係理論がサブ・パーソナルな心的過程を記述したものではないかという推定に、肯定的な結果を得

<sup>17</sup> *Ibid*, p129.

<sup>18</sup> *Ibid*, p121.

<sup>19</sup> *Ibid*, p99.

<sup>20</sup> 論理形式には、論理学を学んだ後では意識できるものと、学んだ後でも意識できないものがあると思われる。この違いは、現在論じている原子命題の論理形式ではなく、複合的な命題の論理形式の場合に明瞭である。ラッセルは、たとえば矛盾律は、論理学を学んでしまえば直接意識されるようになり、それゆえそれ自体としてかなりの明証性を持って知られる (*PP*, p112-3. [邦訳 139ページ]) とする一方で、還元公理や無限公理の場合、その正当化が帰納的なものにとどまり自明性に基づくとは考えていない。後者のような場合、直接意識されることはないと言っていると思われる。

たことになる。なぜならラッセルが「意味」や「意味理解」について論じていたときに問題にしているのは、他者と共有される公共的な知識の対象となる言葉の意味ではなく、発話や文の知覚に伴う個人的な信念の形成だからである<sup>21</sup>。つまり論理形式が暗黙知として含まれる文の理解とは、文の知覚あるいは発話の聴取という感覚経験から、一定の信念を形成する過程のことである。しかし論理形式との面識が暗黙知であるなら、主体は多項関係理論に従った仕方での信念形成を、自発的・意識的に行うことは不可能である。なぜなら、意識的に行おうとすると、主体は信念内容の構成要素となる個物や普遍だけでなく、論理形式をも意識し、その定めるところにしたがってそうした要素を結合しなければならないはずだからである。論理形式が意識できないなら、信念形成も無意識的なプロセスにならざるを得ない。

すると、我々が第一節で立てた問いに、現段階で次のように答えることが出来る。信念の要素や構造を特定するために「分析の方法」という帰納的なやり方を採らねばならないのは、信念とはサブ・パーソナルなレベルで形成されるものであり、面識されない対象や、面識されてはいるが意識できない対象をも構成要素として含むからである、と。それゆえ、一人称的観点からは所与として与えられた複合物の要素と形式を特定するためには、主体自身が内観するだけでは不十分であり、他の信念やデータとの整合性に基づいて、最善の仮説として対象や構造を立てなければならないのである。

#### 4 論理的原子の面識、および前提についての知識

前節では、信念の構成要素のうち、自我と論理形式について、それが「分析の方法」を通じて特定される必要があることを示した。では、信念のその他の構成要素、すなわち個物や普遍など、信念の命題内容を構成する部分についてはどうだろうか。たとえばラッセルの認識論において面識される個物はセンスデータであり、センスデータが意識されないということは背理であるから、

---

<sup>21</sup> Russell (1911a) p152, 153, Sainsbury (1993) を参照のこと。

「分析の方法」を通じた特定は不要だと思われるかもしれない。あるいは、それら論理的原子とともに、データが論理的に再構成される際に前提とされる、パースペクティブの法則などの一般的知識はどうだろうか。

ラッセルの場合、面識の対象となる個物はセンスデータであり、論理形式とは違い実際に注意可能な対象である。しかしこの個物に関して主体が持つ知識にも、分析という過程を必要とするある種の不透明性がある。センスデータについて議論する際には、「赤のセンスデータ」のように語るのが通例であるため、センスデータとの面識による知識によってそのセンスデータが赤いということまで知られると考えられるかもしれない。しかしラッセルにとって、面識という関係は、主体と対象との間に、その他の一切の存在者から独立に成立する二項関係であり、また性質とは個物に内属するものではなく、個物とは独立に存在するイデア的な普遍者であった。それゆえ個物についての面識による知識は、センスデータが存在するという知識をもたらずに過ぎず、それが赤いという真理を主体に伝えはしない<sup>22</sup>。あるセンスデータが赤いということは、サブ・パーソナルレベルでの過程で形成された複合物、たとえば「これは赤い」という信念を分析することによって明らかにされなければならないのである。

普遍と一般的知識については、一般的知識が普遍のみを要素とする知識であるため、一括して論じることができる。心理的には派生的だが論理的には原始的な信念の例として、ラッセルは意味理解だけではなく、物体の位置特定を挙げている<sup>23</sup>。公共空間内の一地点に物体を位置づけるということは、それらについての記述を、感覚されたパースペクティブとセンスデータについての面識による知識と、パースペクティブの法則などの一般的知識から構成するということに他ならないが、そうした構成の結果もまた一人称的観点からは原初的なものとして与えられている。つまり、感覚経験から、物体と空間についての記述を構成し、物体をある地点に定位する過程もまた、サブ・パーソナルな水準

---

<sup>22</sup> PP, pp46-7 [邦訳 58ページ]

<sup>23</sup> OKEW, p67.

に属するのである。だとすれば、そこで前提される一般的知識もまた、主体にとって暗黙的なものであるということがありうることになり、そうした前提が面識によって知られる直観的知識でありながらも、確実ではなく蓋然的な知識にとどまるということも、理解可能になる。さらに一般的知識とは、それが構成要素としている普遍についての知識であるため、その構成要素である普遍もまた、面識されているにもかかわらず、注意されることがないことがありうる

24 面識されている個物と普遍の特定に関して、「複合物の分析」という過程が必要な理由としては、「不完全記号」の学説、「つまり自立的な対象を意味せず一定の文の中でのみ意味を持つ記号があり、それを含む文とその文が意味する命題の構造が食い違う」という論点との関連も重要である。たとえば物体の知覚の際に面識されているのはセンスデータであるが、このセンスデータは物体に関する記述的信念の構成要素として組み込まれている。記述理論によれば、記述的信念は記述句に対応する構成要素を持たない。しかし記述は不完全記号であるため、この物体に関する記述的信念が主語 - 述語構造を持つものであり、物体についての単称的信念だと主体に誤解させる働きを持つ。その結果、主体が、自分は物体を面識しているのだと誤って考えるという事態が生じる。

普遍に関しては、命題関数との混同が最も重要な要因となる。通常、普遍と命題関数はほとんど区別されて論じられていないが、普遍は論理的原子であり他の対象から独立に存在するものであるのに対し、命題関数は、不完全記号によって意味される命題から、その構成要素を変項に置き換えるという操作によって生成されるものであり、はっきりと区別されるべきものである。信念ないし命題を分析するとき、他の信念との整合性や対立が、つまり他の信念との論理的関係が手がかりとなるため、命題関数を単位とする仕方で命題を分析することになる。しかし分析過程において、参照される信念や命題の範囲は普通は限られているため、単一の命題関数とされるものが、単一の普遍を構成要素とするとは限らない。さらには、普遍ではなく個物を要素とする命題関数もありうる（たとえば ‘*x is Socrates*’ のように。Russell (1911b) p144を参照）。それゆえ、実際に我々が面識している普遍を特定するためには、「分析の方法」で行われるように、可能な限り多くの信念を参照しつつ、最もよいやり方で命題を代入項と命題関数に分析し、そうして析出された単純な命題関数を、単純な一つの普遍のみを要素とするものとみなす、という過程が必要となる。

以上のまとめでは、解釈としての正当性が疑われるかもしれないが、個物に関しては知覚についての発言から、普遍に関しては理論的知識の進展に関する発言から、ラッセルが以上のように考えていたということを示すことができると私には思われる。しかしそれを実際に示すには、稿を改めなければならない。

ことになる<sup>24</sup>。

以上のように、自我や論理形式といった要素だけでなく、個物や普遍といった信念の命題内容を構成する要素に関しても、またデータを論理的に再構成する際に前提となる一般的知識に関しても、「分析の方法」を通じて特定するという過程が必要なのである。分析の結果得られた信念の演繹的体系は、面識もしくは直観的知識という単純な知識から、それらが論理的に組み合わされた複合的な知識へという、知識の秩序をたどるものである。しかし、それは決して容易に理解できる知識から理解しがたい知識へという秩序ではない<sup>25</sup>。むしろそれは、経験において意識されている内容と暗黙的に知られている知識という、一生物としての人間が原初的に所有する知識から、それらが組み合わされて生じる複雑な知識へという、知識の生成過程の秩序であると言えるだろう。経験の意識的内容が厳密にはいかなるものか、そしていかなる暗黙的知識を持っているかは、決して主体自身が内観によって特定できるものではない。それゆえ、すでに得られた科学的知識などを利用し、それらとの整合化を図りつつ明確化するという、「分析の方法」という手法を採らなければならないのである。

## 参考文献

- Hager, P. (2003) "Russell's Method of Analysis." in Griffin, N (ed.) *The Cambridge Companion to Bertrand Russell*, pp310–31.
- Irvine, A.D. (1989) "Epistemic Logicism and Russell's Regressive Method." in *Philosophical Studies* 55, pp303–27.
- McCulloch, G. (1989) *The Game of the Name*. Oxford : Oxford University Press.
- McDowell, J. (1979) 'Truth-Value Gaps' in Cohen, J.L. (ed.) *Logic, Methodology and Philosophy of Science*. New York : North Holland Publishing Co., pp299–313.  
Reprinted in his 1998, pp199–213.
- (1998) *Meaning, Knowledge and Reality*. Cambridge : Harvard University

<sup>25</sup> 「より単純なものは、より複雑なものよりも、必ずしも理解が容易ではない。むしろそれが通例でありさえするということを認めなければならない」TK, p133. Russell (1907), p273も参照。

Press.

- 中川大 (2006) 「論理的真理は総合的か——ラッセルの論理主義——」『思想』2006年第7号、73-87ページ。
- Russell, B. (1907) "The Regressive Method of Discovering the Premises of Mathematics," in Lackey, D (ed.) *Essays in Analysis*, London: George Allen and Unwin, 1973, pp272-83.
- (1911a) "Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description." in Slater, J.G. (ed.) *The Collected Papers of Bertrand Russell, Vol. 6*. London: Routledge, 1992, pp147-61.
- (1911b) "Analytic Realism" in Slater, J.G. (ed.) *The Collected Papers of Bertrand Russell, Vol. 6*. London: Routledge, 1992, pp132-46.
- (1912a) *The Problems of Philosophy*. Oxford: Oxford University Press. [『哲学入門』、拙訳、ちくま学芸文庫、2005年。PP と略記]
- (1912b) "On Matter." in Slater, J.G. (ed.) *The Collected Papers of Bertrand Russell, Vol. 6*. London: Routledge, 1992, pp77-95.
- (1914) *Our Knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy*. Chicago and London: Open Court. [『外部世界はいかにして知られるか』石本新訳、中央公論社、「世界の名著」58、1971年。OKEW と略記]
- (1918) "The Philosophy of Logical Atomism." in Slater, J.G. (ed.) *The Collected Papers of Bertrand Russell, Vol. 8*. London: Allen and Unwin, 1986, pp157-244. [『論理的原子論の哲学』、拙訳、ちくま学芸文庫、2007年。PLA と略記]
- Sainsbury, R.M. (1993) "Russell on Names and Communication." in Irvine, A.D. and G.A. Wedeking (eds.) *Russell and Analytic Philosophy*. Toronto: University of Toronto Press, pp 3-21.
- 高村 夏輝 (2007) 「代表象説のどこが間違っているのか」『科学哲学』第40号第1巻、日本科学哲学会編、2007年、81-94ページ。
- Whitehead, A.N. and Russell, B. (1910-3) *Principia Mathematica*. 3 vols. Cambridge: Cambridge university Press. [『プリンキピア・マテマティカ序論』、岡本、戸田山、加地訳、哲学書房、1988年。PM と略記]